

注目のキーワード「蛤」

2月中下旬から3月上旬にかけては、二十四節気のうえでは、雪が雨に変わり雪解けが始まる「雨水」(2025年は2月18日)、土の中で冬ごもりしていた虫が穴を開いて地上に出てくる「啓蟄」(3月5日)とされます。また、3月3日は日本の伝統的な季節の行事(五節句)のうち上巳の節句(桃の節句)であり、いずれの言葉にも春の訪れが近いことを感じます。

この桃の節句で供される行事食には白酒や菱餅がありますが、蛤の潮汁を楽しむ方もいらっしゃるのではないのでしょうか。この蛤、産卵期は夏なので実が太る春が旬ですが、水温が下がり成長が止まることで栄養分が蓄えられる冬も旨みが増して美味しいとされています。シンプルに塩味で調味する潮汁は、その旨みを堪能するのにうってつけです。

日本で食べられる蛤は、在来種であるハマグリ(あるいはホンハマ)とチョウセンハマグリ、そして中国から輸入するシナハマグリです。在来種の主要産地は、チョウセンハマグリを主とする千葉県や茨城県、また三重県や熊本県ではホンハマが獲れ、産地名を冠したブランド蛤もあります。残念なことに、蛤の国内漁獲量は環境の変化や乱獲を原因として激減しています。水産庁の統計によれば、1960年代中頃までは全国で1万トン以上水揚げされていましたが、それ以降は減少。2006年の867トンを最後に、全国統計としての項目からも外れています。また、茨城県が公表するデータによると、同県のチョウセンハマグリの漁獲量は、1989年以降は1,000トン台で推移していたものの、漁獲量は漸減し、2010年代前半は100トン前後に留まっていました。しかし、同県における水産資源保護の努力により、2018年以降は200トン以上の水揚げが続いており、2023年には16年ぶりに500トンを上回る漁獲量があったとのことでした。

蛤以外にもサンマやウナギ、サケなど、気候変動や他国による乱獲も含めた様々な原因により漁獲量が減少し、値段も高騰していることでなかなか手が出なくなってしまった海産物が増えているように感じます。旬の海産物や農産物などを楽しむ、あるいはそうした食べ物や行事食に季節を感じる、という豊かさや文化を、何とか未来の世代に繋いでいきたいものです。

(総合調査部 政策調査グループ 次長 穴戸 美佳)

Side Mirror

また、トランプ大統領の発言に一喜一憂、振り回される時代がやってきた。2017年からの第1期政権時代、眉を顰めるような発言も多く、「天下のアメリカ大統領なんだけどなあ…」と感ずることもあった。ただ多くの人が、アメリカ合衆国という国を、改めて学んだ時期だったとも言えるのかもしれない。間を挟んで再登板となれば、当たり前だが、前回の経験を踏まえある程度やり方も変えてくるのが普通であるが、今のところ第2期は、こうきたか!というぐらい、第1期に比べて、より“らしさ全開”でスタートしているようだ。

就任前から、「グリーンランドを手に入れる」、「メキシコ湾の名称をアメリカ湾に変更する」、「カナダは51番目の州になるべき」と、MAGA(Make America Great Again)のためには、相手のことにはお構いなしで発言。就任後には、不法移民の強制送還で、コロンビアの対応に激怒して、25%の関税賦課を発表。当日、ディール成立で関税案撤回。カナダ、メキシコへの25%関税も、土壇場で一部ディールが成立し導入延期が決定。数々の発言自体は、超大国アメリカの大統領に全く相応しくないと強く思うが、所謂“衝撃と畏怖”(Shock & Awe)と言われる、最初に衝撃を与え、相手を恐れおののかせて、戦う意欲を奪うやり方で、結果的にディールを成功させている。やり方はお世辞にも上品とは言えないし、“衝撃と畏怖”では信頼関係構築は難しいが、それでも選挙公約を実現しているのも事実で、支持層の支持は揺るぎない。

しかし、自国の周辺を、「それ俺のもの」と平気で言えるのは怖い。どれだけ時代が進んでも、大国と言われる国の指導者には、そうした思いが募るものなのだろうか。それとも、大国と言われる国の国民は、そうした指導者をより熱狂的に支持するようになるものなのだろうか。

いつの時代でも“歴史”は動いているが、安保理常任理事国ロシアが隣国と戦争を始め、経済的な相互関係を構築しながらあらゆる面で覇権を争う米中の対立。“歴史は韻を踏む”と言われる。100年前とは経済規模も、社会構造も科学技術も全く違うが、これから歴史はどんな韻を踏んでいくのだろうか。

(佐久間 啓)